



なんでもやってみよう

藤本 徳毅

滋賀医科大学皮膚科学講座教授

私は大学を卒業後、すぐに皮膚科に入局した。研修医が終わるころに上原正巳元教授から大学院進学を勧められた。自分は退任が近いので皮膚科ではなく基礎で研究してはどうか、と提案され、軽い気持ちで病理学第2講座で免疫学を学ばせていただくことにした。しかし、行って早々に小笠原一誠教授から、「まずはお試し期間だからね。ついて来られないとクビだよ」といわれ、いままで読んだこともない『Nature』や『Science』などの基礎研究の論文を必死に読み、たくさん実験をした。めざましい成果は出なかったが、実験のイロハからたたき込んでいただき、滋賀にいても世界と戦えることを学んだ。

大学院卒業後は大学の皮膚科に戻り、当時赴任してこられた立花隆夫先生が執刀する手術の多くに助手として入らせてもらい、手術の勉強をさせていただいた。膠原病にも興味があったが、当時の皮膚科では生検だけして治療は内科に依頼、という体制であった。そのため、呼吸器内科や血液内科の先生に併診してもらったり、学会や研究会で質問したりしながら、全身症状を伴う膠原病患者さんを少しずつ皮膚科で治療していった。皮膚脈管膠原病研究会では、演者に厳しい質問をする大御所の先生方に、懇親会などで勇気を出して質問して顔を覚えてもらい、多くのことを教えていただいた。会場では怖い先生が、みな笑顔で丁寧に教えてくださったのが印象に残っている。

助手になりたてのころに、雑誌『皮膚の科学』の編集委員をしないかと先代の田中俊宏教授から提案された。深く考えずに引き受けたものの、編集会議に参加してみると、まわりは教授や有名な先生ばかりで、意見を求められても冷や汗をかきながら同意するのが関の山であった。しかし、続けているうちに多くの先生と知り合い、その先生方からはいまでもご指導いただいている。

振り返ってみると、高い志をもっていたわけではなく、そのときどきにできることをなんでも一生懸命にやってきただけであるが、それらがすべて現在につながっているように思う。おかげで、いまでは膠原病と皮膚外科を専門として大学病院で働かせてもらっている。医学部の学生さんや若い先生方と話をしていると、昔に比べて情報が多いためか、考え過ぎてるように感じる。損得を考えずに目の前の提案に飛びついていっても、長い目でみるとどれも損なことはなく、いろんなことをやればやるほど何者かになれるのではないかなと思う。作家の沢木耕太郎は、「人が青年でなくなるのは、年齢でも結婚でもなく、生命保険に入った時である」と書いている。専門医取得や開業するのに必要ないとか、いまは手一杯だからいずれしようなどとあれこれ考えずに、若い先生方にはなんでもやって欲しい。それらすべてが皮膚科医としての幅を将来広げることになるはずだから。